# 幼兒にきかせるお話

## 珊瑚のくびわ

よしこ

或るお家の臺所のながしにお魚がねて居ました。この魚は、今までは多勢の友達と一緒だつたのでさうも思ひませんでしたけれど、かうしてたつた一人ぼつちになつて見たら、大變に海が戀ひしくなつて來ました。海はよかつた、ひろ〳〵した水の中で思ひきり鰭をひろげて、皆と遊んだこともあつたし、岩のかげにかくれんぼをして面白かつたつけ、と思ひながら、さめ〴〵と泣き出しました。

あゝ海に歸りたい、でももう仕方がないけれど誰か連れて行つてくれるものはないかしら、逃げることは出來ないし、軀も弱つて居るし、又泣いて居ました。ふと氣がついて見ますと、こゝの三毛猫がさつきから、隙があつたらと思つて、ちよい〳〵この魚を見て居る「猫さんは魚好きだから、もしかすると食べられてしまふかも知れないが、でも優しいから賴んで見ようかしら」と思ひました。

あゝ海が戀ひしい、青い水が見たくなつたと泣いて居る聲をきゝつけて、猫がそばに寄つて來たので、

「まし〳〵猫さん、私を海につれて行つて下さいな」

「おや、魚さんかい、お前さんは口をきくことが出來ないものと思つて居たら、話が出來るのだね、それは面白い、私は海の話がきゝたいと思つ

て居たのだ、まだ見たこともないのだからね」

「えゝ、海の話はして上げますが、それより私の願をきいて下さいな、何卒私をもう一度海に連れて行つて下さいな、私はたまらなく海に歸りたくなつたのです」

「さうかい、今まで隨分お前さん達の世話にもなつたから今日は連れて行つて上げよう、ついでに海といふところも見て來よう、」

「さうですか、うれしい〳〵、いゝ所ですよ、きれいな水の中はひろ〴〵して居てお友達が澤山居ます、青いのも、赤いのも、小さいのも、大きいのも、鯨なんてあの空を通る飛行船のやうですよ、こんぶもあるし、さゞいだの、あはびだの面白さうに這つて居るし」

「どれ、行かうか」

三毛さんは、ソーッと魚をくはへて、家の外に出ました、みんなに見つからない樣に、犬だの、意地惡の猫にあふと大變だと思つて、なるべく靜かな裏通りを通つて、

「さあ海に來たよ」と魚を下ろしました。

「あら、これはどぶぢやありませんか、もつとひろくつて、もつと水がきれいですよ」

又しばらく歩きました。

「そら來た」

「あらこゝもちがふの、こゝは川といふのですよ、海はね、もつと廣くて水が鹽からいの、一寸なめてごらんこゝのはたゞの水と同じでせう」

「なる程ね」三毛さんはのどがかはいて居るので澤山水をのみました。

ずん〳〵歩いて行く中に波の音がきこえて來ました、潮のにほひがプーンとして來ました。魚は體がおどる樣にうれしく思ひました。三毛は砂地に魚をおろしましたら、

「あゝ、うれしい、私はもううれしくつて口が

きかれません」といくつも〳〵おぢぎをしました。魚は、

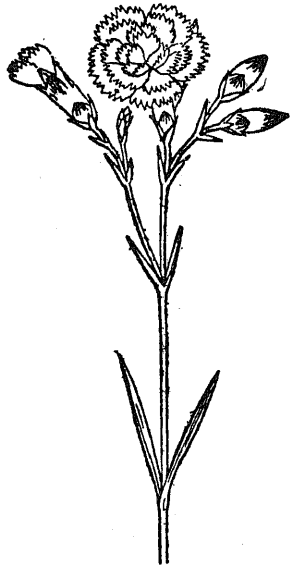
「ほんとに猫さんありがたう、私も水に歸れました、明日の朝早く又こゝに來て下さいね」

と云つてドブーンと水の中にとび込んでしまひました。始めて見た海をしばらく三毛はながめて居ましたが

「まあ、なんていゝところだらう、今まで食べて居たあの魚たちは、これなきれいな、靜かな水の中に居たのかしら、どうりでおいしい筈だ、一寸ならはいつてもいゝだらう」

さう云つて片手をつつ込んで見たら冷いのでぶる〳〵としました、大事な毛をぬらしたのでペロ〳〵なめて、家に歸りました。明日朝の同じ海のほとりに行つて見ましたら、きれいな砂地に小箱ががおいてあります、三毛さまへと手紙もついて居ます。あけて見ましたら、



先日はありがたうございます、おかげ樣で無事に海に歸ることが出來て、父さんや、母さんや兄だいや、友達が、大變によろこびました。海の宮のお姫樣にも申上げましたら大變にあなたをおほめになつて、これを上げますとおつしやいました、どうぞお持ち歸り下さいませ、

とかいてあります。箱の中をあけましたら、珊瑚の玉をずつとならべて作つたくびわが、やはらかい絹のきれにつゝんではいつてゐました。